



▲左から島田副会長、宮本健太郎(通訳)、内木

「特集・第17回「アシテジ世界大会」」 デンマーク・スウェーデン世界大会に出席して

アシテジ日本センター会長 内木 文英

アシテジの世界大会は三年に一度である。ロストフ・オンドン(ロシア)、トロムソ(ノルウェー)、ソウル(韓国)、モントリオール(カナダ)、アデレード(オーストラリア)と出席してきて、私にとって六回目の世界大会となる。今年の世界大会はデンマークとスウェーデンの共同主催ということで、どういうことになるだろうと気がかりなところもあった。

五月二十日(金)に成田を出

発、そして同じ五月二十日、コペンハーゲンに到着。バスでスウェーデンのマルメ市にむかう。国境の海をどうするのか、と想像していたら、長い橋がかかっている、海を渡るとスウェーデンだった。パスポート無しで別の国に入る。そんなことが今までにあったらどうか。

世界は変わったと感じた。ユーロが、ヨーロッパの国と国の関係を今までと違ったものにしたのか。

マルメオペラ劇場で歓迎のための演奏会が開かれる。ウォルフガング会長や、キム・ウオク(金雨玉)先生などなつかしい顔と出会う。疲れ果てて、コペンハーゲンのホテルに帰った。

五月二十三日(月)、スウェーデンのマルメ市の聖ガートルートというところで全体会議、開会式が開かれる。コペンハーゲンから電車で三十分。「九時の開会に遅れないように」と会長から言われていた。八十三か国、三百人ほどの代表が、広い会議室を埋めていた。

「日本の会長、内木さんが来ています。内木さんは八十六歳、今日の出席者の最高齢であります」

会長は手をのばして私を指差しながらしゃべった。びっくりした。まさか、開会式の、会長の挨拶の一番初めに私の名前がよばれるとは考えてもいなかった。宮本健太郎君が通訳してくれた。私も挙手をして立ち上がり、左右前後の会員に頭を下げた。びっくりするような、大きな拍手が起る。何度も頭を下げて着席した。

「何だろう」と思った。

参加者すべてが、あの地震、津波、原発のことをテレビで見ている、日本のことを気にかけていたのだ。そのことに気づいたのは、ずいぶん時間が経過してからだ。

今度の世界大会が、日本に対していろいろ配慮している。そう感じた。私は疲れ果て、後半は副会長にまかせきったところがある。アジアパティーも成功だった。ふじたあさや氏が世界

界理事に当選してよかった。私にとって一番ありがたかったのは二十七日の「オーデンセ、ツアー」に参加できたことだ。

私は十八歳の時に早稲田に入ったのだが、作家の坪田譲治と出会い、その弟子になったつもりでいた。アンデルセンと宮沢賢治に心を奪われた。昭和二十二年頃、古谷綱武という評論家の弟子になったつもりで作品を書いた。ある日、綱武さんが、岩波文庫を私に手渡すのだ。「アンデルセン自伝」であった。彼が五十歳になった時に書いたものだ。

「私の生涯は変化に富んだすばらしいものだった。それはさながら一篇のメルヘンのようなものだ」

手元からその「自伝」は失われているので、その文章がこの通りであったとは言えないが、その「自伝」の、冒頭の言葉が私の心をとらえて、今でも、私の身体の中に生きている。アンデルセンの生まれ育ったオーデンセを訪ねることができて最高にうれしかった。

アシテジ世界大会に今年も参加できてよかったな、と思っている。次はポーランド、ワルシャワと言われている。ああその時、私は満八十九歳になっているのだ。

アシテジ世界大会に出席して

ふじたあさや

五月二〇日から二九日まで、デンマークとスウェーデンの共同開催で、コペンハーゲンとマルメの両市でおこなわれた、アシテジ世界大会に出席してきた。私は日本国内の公演スケジュールの都合で二四日から参加だったので、会議の全容についての報告は、全日程出席のメンバーに譲り、今大会で感じたことを、一二書き記すことにする。

土方さん以来、香川さん、小林さんと、世界理事を出し続けてきた日本は、小林さんの退任から三年、日本センターとしてはつながりが薄くなっていた。その間にアシテジでは、大きな変化が起こりつつあった。

最大の変化は、アシテジの組織原理が変わろうとしていることである。これまではそれぞれの国のナショナル・センターを唯一の会員としてきたが、今後は演劇祭などを主催する母胎、さまざまなネットワーク、個人まで含めて会員資格を拡大しようということが議論されていた。反対論、棄権もあって、そのすべてが一挙に実現したわけではないし、そのためもあった、規

約の文言の確定は三年後に持ち越されたのだが、主要な方向は確認されたといっているだろう。

これは、一方では、児童青少年演劇分野でも国際演劇祭が増え、多様化していることと深くかかわっている。そこでは、国レベルを超え、実質的な国際交流が実体化しているという現実がある。また、国境を越えあう中で、言語に頼る度合いが相対的に減ってきて、作品内容自体が国境を越えやすいものに変化しつつある、ということもある。さらに、ヨーロッパ圏を中心に歴史的に国意識より都市意識のほうが強いということもある。また、国にこだわると政治に絡



▲アシテジ世界会長(中央)、事務局長と

めとられるという国もたしかにあって、国にこだわったのでは自由な発展が期待できない、と考える人がいることもたしかである。その一方で、ナショナル・センターが変質してきた国もあって、センターの機能を果たしていない、あるいはセンターが休眠状態にあると判断された国が、この総会で数か国除名されたということもある。(その中にフランスが含まれていると聞いたら、かつてのフランスの活躍を覚えている人は驚くことだろう。)こうした状況を先取りするかのように、児童青少年演劇の市場は、あきらかにグローバル化の方向を探っている。

すべて活性化のためだ、とイヴィッツァ事務局長はいった。言葉の壁もあり、組織の成り立ちにも独得のものがあって、あきらかに温度差がある日本で、こうした動きについての議論が、積極的になされる必要がある。

私は今回の総会で、世界理事に選ばれた。はっきり言うが、賛成八七票、反対六四票である。地球上における日本の、今の位置を象徴しているような数字である。この数字の重みは、東京



▲新しく選出された理事と一緒に(中央筆者)

電力にも、菅首相にも、背負ってもらう必要があるが、より多くわれわれが背負うべきであろう。われわれは、歴史的に行政の支援に頼ることができなかったこの国で、職業的に児童青少年演劇人であるために、学校公演や、親子・子ども劇場に頼らざるを得なかった。その結果、

そういう組織的観客におんぶするのための、安定路線を走っているのではあるまいか?……などということまで含めて、ありようを議論すべき時に来ていると思う。言葉の壁を理由にしているたら、ふと気づいた時には、世界の孤児になっている可能性さえある。こんなに大勢の優れた才能をかかえながら。

海外から見ると、日本の児童劇界は鎖国をしているように見えるだろうな——というのが、

今回のアシテジ総会と最初の理事会に出席しての感想である。ちなみに今年の大会の日本の出品作は、児童青少年演劇(と従来括られていたもの)ではない。だからどうというのではない。われわれが児童青少年演劇と認めていなかったものが、児童青少年演劇として選ばれたという現実を直視しようというのだ。「がーまるちよば」のお二人は、あきらかに国境を越えた表現を探って、善戦していた。あれはドラマではないだろう、というのは簡単である。それをいうなら今回の大会で上演されたうちに、旧来のドラマとは無縁のものがいかに多かったか。

来年、沖縄のキジムナー・フェスを機会に、世界会議(三年に一度の世界大会の間をつなぐ年一回の会議)を沖縄でひらくことになったのは、全体のこうした流れと無関係ではない。もちろんフクシマへの配慮もある、とイヴィッツァ氏はいわれたが、それだけではあるまい。市場としてのアジア(とくに発展著しい中国)が見えているだろうし、アジアの創造方法への関心もあるだろう。そうした関心からいうと、沖縄というのは、地理的にいってもベストの選択だといってもいい。時代は、音を立てて変化しつつあるのだ。

ていて、確かな人間を感じる。立ち去り難い気分になり、今でも心が熱い。

今回、他の作品でパソコンを駆使した映像とのコラボが多数見受けられたが、残念ながら想像を削ぐだけで、生の舞台を助けていなかった。どんな手法や手段を使うのが、創り手側の興

とてもいい刺激を受けました

後藤優子

5月21日から29日の9日間で25作品を観劇、2つのワークショップ、1つのセミナーに参加しました。最終日には連続6作品の観劇という、贅沢かつハードスケジュールでしたが、どの作品も質が高く（俳優、スタッフワーク共に）とてもいい刺激を受けました。その中でも特に印象に残った作品をあげてみます。

まずWHITE（ホワイト）。俳優は男性2人（1人はかなり年配）。まっ白な世界で繰り広げられる遊び心にあふれた、胸がキュンとざわめく素敵な作品。

次にASTONS STONE（アストンの石）。俳優は3人（アストン、その父、その母）。父と母の役は時々「語り手」にもなり、父はキーボード、母はエ



▲『アストンの石』スウェーデン

ざるをえない」とすれば、皮膚感覚で誤魔化すのは止めにすべきだ。「表現者は、演技と己れの魂を磨き、骨太な人間像を目指したい」と改めて強く思った。演劇祭の期間中、何度となく行き来した二国間の海峡。風力発電の風車の白さが、目に残る。（太鼓と芝居のたまっ子座）



▲『わたし あなた わたしたち』デンマーク

レキベースも演奏し、歌も歌う。3人の熟練された俳優の個性が光る作品。どちらの作品も、シンプルな題材を子ども目の目線にたって丁寧にやさしく描いており、また俳優の力量の高さ、舞台美術、衣裳、音楽、照明等のスタッフワークのセンスの良さが抜群でした。

そしてME YOU US（わたしあなたわたしたち）。俳優（ダンサー）は2人（男性1女性1）。アリーナ舞台。最前列

はデッキチェアで、子どもと子どもを抱いた大人の専用席。セリフは無く、ダンスと音楽、沢山の仕掛けが不思議な世界へ誘ってくれる。男女が出会い、交流し…その驚きや発見を見事なダンスでみせてくれた。暗い照明にもかかわらず、子どもたちは怖がらず、集中していたのにびっくり！子どもたちの未知の世界に対する興味、関心、感受性の豊かさを感じた。日本でもこういう作品が公演できたらいいのに…。

あと「EVERY YEAR, EVERY DAY, I AM WALKING（さつ）もいつも私は歩いてる」。俳優は女性2人（内1人は黒人）。実際の砂や火を使い、繊細な心象風景を見事に描いていた。2人の女優がステキ。

あと、IN THE BUSH（藪

印象に残った作品2つ

奥山みゆき

初めてアシテジ「世界大会」に参加させていただきました。

いくつか、気になった作品としては、「white」「concerto for Roses and thorns」の2つが特に残りました。

「white」は、白い舞台、白い舞台装置、白い洋服を着た男性、全て白い世界。会場に入場した

の中で）。俳優は5人（男性4人女性1人）。全てアカペラ。動物や鳥の声、ボディパーカッションによるリズム…身体調整能力の高さ、身体表現の豊かさを感じた。ダンスカンパニーDDB（男性2人女性2人）によるダンスも圧巻。

その他まだまだたくさん…。会場となったコペンハーゲンとマルメは自然に囲まれた美しい町で、のどかで治安もよく、ゆったりと時間が流れている感じがした。芝居を観る環境の違い（社会的な位置付け、会場条件など、etc）を目のあたりにし、日本の現実について思いをはせずにはいられません。微力ながらも、この経験を今後の演劇活動の糧にしていきたいと思えます。

（劇団うりんこ）

ときから居心地の良い空間でした。

いつの間にかお芝居が始まり「xあ、観るぞ」と構えることなくリラックスした状態でこの作品の世界に入っていました。白い世界に、カラーは絶対なく、色のついたリボンを見えると、排除される…。



▲『CONCERTO FOR ROSES AND THORNS』ブラジル

始めは、客席側も笑ってその事を受け入れていました。

空から白いタマゴが降って来る中に赤いタマゴが入ってきた時には、今までとは違う空気が流れ、ピンと張るものがありました。

『この赤いタマゴにも命がある...』

と言わんばかりに息を飲む客席の人々。

赤いタマゴにも、白いタマゴにも共通する「命」。

そして、生まれてくる「命」を受け入れることで、いろんな色があつて良い、いろんな人がいて良い。違つて良い。と訴えているように思えました。

観終わった後、誰もが心が暖

かくなり、幸せな気持ちになれる素敵な作品でした。

そして、「Concerto for Roses and thorns」は、ブラジルの歴史が芝居と音楽で表現され、生演奏と歌がとても迫力がありました。

この作品は、ブラジルの誕生祭のお話のようでした。

後半にお客さんを演技スペースに招き入れ、出身の土地や、国を床に書かせ、みんなで拍手をしてお祝いをする演出が大好きでした。

自分の生まれた所を誇りに感じ、いろんな国の人でも、歌いながら受け入れる雰囲気を感じ心地良く感じました。

最後には、ジュースを客席全

員に配り、この出会いに乾杯したり、カウベルをみんなで鳴らしたりと、客席と一緒に楽しめる演出も良かったと思います。

言葉が全く分からない私でも、なんとなく雰囲気で大まかな内容もわかり、楽しめた作品でした。

2つの作品に、共通していたと感じるのが、違うものを受け入れるというところなのではないかと思いました。それは、この海外で過ごす中で感じた事でもありました。

いろんな国の方に出会え、自分と、他人との違いを感じることの出来たアシテジ「世界大会」でした。

(劇団道化)

大きな感動とパワーを得ました

下川 瑠美

私にとっては、四度目の参加となるアシテジ世界大会。しかも今年は、デンマーク・スウェーデン共催！どんな作品と出会えるのか...！胸はときめく。

初日から早くも出会ってしまった「Every Year, Every Day, I am Walking」は南アフリカの作品。度重なる居住地の移動。

越えられない肉親の死。少女の切ない思いが、ストレートな俳優の表現と巧みな演出で心に響

く。砂の上、音を鳴らしながら靴を歩かせるシーンは哀しいが美しい。「私は歩き続ける」そう言いながら、しかし最後には舞台をただただ全力疾走で走り続ける少女の生きる力に、怒りと希望を感じながら、私たちは私たちの立ち様を考えずにはいられない。

「White」はスコットランドの作品。笑いながらワクワクとした時に「おおっ」と感嘆の声を上



▲『私はいつでも歩いている』南アフリカ

げながら舞台を観る私は、小さな少女に戻っている。「違う」ことを受け入れる素敵さ、それを分かち合える友。愛ある美しい世界が確かにあるのだと、見終わって大人に戻った私が、小さな少女の心で感じた思いでいっぱいになって泣いていた。

乳幼児作品での素晴らしい出会いは「Ahh, Hello Babies」。ゆつたりと、しかし確実に小さな人たちの五感を感じながらコミュニケーションをしていく舞台は、まさに私の目指したい小さな人と創り合う創造の空間!! 作品自体が、「目覚め」であつ

たり、遊び・お風呂・歯磨き・眠りという生活体験をアートにしているよう...小さな人たちの世界感を大切にしたい舞台だった。

この作品を生み出したスウェーデンでは、乳幼児作品の研究が進んでいる。今回は乳幼児作品のレクチャーにも参加し、その研究や実験的作品などの話を聞き、映像で観る事ができた。

話の方は言葉の垣根があり残念な事にほとんど理解は不能。しかし、映像の方は興味深く刺激を受けた。日本でも必要とされ、創造団体としては、学習や研究、創造を深めていかなければならない分野だ。「試行錯誤をする中で、ここからまた新しいアートを生み出していきけるのでは!」

日本に帰って、創造団体の仲間から受けた言葉が心に響く。私は母国語オンリーな人間なので、一緒に観ていた人と話をする、と、びっくりするほどストリーやとらえ方が違うことがある。今回もそうだと思う。しかし、だからこそ面白い。日頃、「芸術は理解するものではないと感じるものだ。」と思いつつも、やはり大人の目線で理解に走る節も出てくる。特に言葉はやっぱり。言語理解が不自由だからこそ、感じる事を優先にする子どもたちの目線で作品と出会える。私を演劇の原点へ戻してくれる。—そんな世界中の芸術

作品と出会うアシテジ世界大会の参加は、今回も私にとって、大きな感動とパワーを与えてく

れる忘れられない経験となった。
(アートイン
A s i b i n a)

アフリカの作品にも感動

大 潤 弘 幸

80日間世界一周というジュエル・ヴェルヌの本がありました。私は8日間世界一周をした感覚になりました。デンマークに居ながら、世界各国、27作品の芝居を観たからです。アフリカ、ヨーロッパ、中東、アジア、北アメリカ、南アメリカ、オーストラリアの様々な国です。



▲『IN THE BUSH』 ザンビア

たくさん観た中で、印象深かった作品に、スコットランドの「ホワイト」という作品がありました。初老の男性と青年の二人芝居。セツトはタイトル通り、すべて真っ白。そして、なぜだか、様々な高さの位置に巣箱が。この巣箱は本物の小鳥が出入りしそうな大きさ。彼らの仕事はその世界に紛れ込んでくるカラ―な物を排除することと空から降ってくる「たまご」を受け止め、巣箱に入れること。見た目には、ユーモラスに見えるが、誇りを持って、こなししています。そして、ある日、空から、なぜか、赤いたまごが降ってきます。赤いたまごを排除しようとする初老の男性。赤いたまごでも、たまごはたまごなのだからと、その行動を止めたい青年。結局ごみ箱に捨てられるたまご。青年はたまごの事が忘れられず、こっそり、夜中に、たまごを救出してしまいます。そして、巣箱にしまいます。青年が満足げに寝てしまうと、赤いたまごを入れた巣箱から赤い光が輝き出

します。そして、様々な色に変化していきます。翌朝、いつも通りの仕事をしようと二人が起きるとチラホラとカラ―な物たちが現れます。それぞれに相手が見つからないようにカラ―な物を隠しますが、追いつきません。最終的に白以外の色を認め合う二人。カラフルな紙吹雪が最後に会場に飛び散りました。このお芝居が印象深かったのは、役者の力量や演出の素晴らしさもあるのですが、なんといつても、観客席にいる人々が、白い人、黄色い人、黒い人、様々なカラ―を持った人がいたからだと思います。

きつと、これも演出なのだと思いますが、カラ―を認め合う。もつと、煮詰めていけば色んな相手を認め合う、と解釈できる気がしたのです。この作品はそ

ため息がでるほど素敵でした

広 中 省 子

の事を押しつけるわけでもなく教訓的にもならず、ふと、気付かせてくるものでした。このほかに今回の大会では、アフリカ勢の作品にも感じるものがありました。「IN THE BUSH」ザンビアの作品では動物の表現の仕方がまさにアフリカ感覚でした。動物の鼓動が聞こえてくるような表現。「私はいつでも歩いている」南アフリカの作品では、砂をこぼしながら足あとを残す手法にこれまでの歴史の足あとを感じました。その他、この字数では書き切れないほど作品は観ました。それはまたいつか。観客席に子どもたちは少なかつたのですが、27作品に出会えたことに感謝しています。(劇団風の子)

今回は私の所属する「おやこ劇場・子ども劇場」で関心の高い、乳児・未就園児・幼児(年少・年長)向けの作品をたくさん見ました。小さい人たちに向けてつくられた作品の多くは、ため息がでるほど素敵でした。それは人生の始まりにおいて、質の高い芸術にであう体験が

う！人生は驚きに満ちているね。「さあ!!人生の旅にでかけよう!」と。

もちろん日本の乳児や未就園児向け作品も素敵なのですが、比較してみると何か微妙に違うのです。その違いは一体何なのか?を考えてみました。

今回見た「ME YOU US (私、あなた、私たち) (デンマーク・6カ月〜4歳)や「HATCHING DAY」(孵化の日) (フィンランド・3歳〜10歳)「SONGS FROM ABOVE (天上からの歌) (デンマーク・2歳〜4歳)「WHITE (ホワイト) (イギリス・2歳〜4歳)からは、共通して「美しさ」を感じました。それは具体的にはダンサーや演者の身のこなしであったり、舞台全体に醸し出される世界観だったりするのですが、日本の作品から感じたことはあまりありません。日本の作品の多くは、ざっくり言うところの「遊び」中心で、「たのしい」「かわいい」印象の作品が多いことに気が付きました。おおむね単純で明るいのです。「たのしい」「かわいい」と「美しい」の違いは、何か?何が違うからこうなるのか?作り手が子どもたちをどういう存在ととらえているのか?乳幼児は言葉や思考が未発達な存在だから、たのしく、シンプルでわかりやすい

ものをと考えるのではなく、言葉や思考の未発達な乳幼児だからこそ彼らの感じとる力を信じて、真つ直ぐに彼らの精神世界に働きかけるといふ姿勢でしようか。プレイ（遊び）ではなく、どの作品もドラマ、人々との関係をきちんと描いていると思いました。

その中で特に驚いたのは、6月4歳を対象にした「私、あなた、私たち」。平土間の会場には、円形の舞台のまわりに子ども用の小さな木製のデッキチェアが置かれ、子どもたちはそこに座って見るのですが、赤

ちゃんも抱っこではなく座って見るのです！さらに会場が薄暗かったことも驚きでした。赤ちゃんとそんな薄暗いところで一人座らされていたら泣くのではないかとという心配をよそに、赤ちゃんたちは30分間の上演中、ずっと目でダンサーの動きを追いつけていました。声まで出して反応する姿に、尊敬の念すら感じました。こういう体験を通して、母子の間に育まれていくものの大切さを改めて実感しました。

（子ども・おやこ劇場東海連絡会 運営委員長）

心に残る作品をいくつか

森田新子

第17回アシテジ世界大会は、美しい景色と歴史の香りに包まれた街で開催された。私は初めて参加したが、心に残る作品を観ることができた。そのなかで特に次に挙げる作品が印象的であった。

幼児向きの作品から

地元の小さなお客様（3歳）の集団と一緒に観た「孵化の日」（フィンランド）は、最前列の床に坐った小さな観客と空気を共有しているような不思議な作品であった。手の届きそうな小さな舞台が何よりも良い。シンプ

ルな花が一つだけ。一人芝居が始まる。お面で表情が見えない。てんとう虫を手にもイムとダンス。静かな音楽と照明で浮かび上がる動き。子どもと同じように大人の私もその空間に引きずりこまれていった。激しい動きや強烈な個性を主張しないその静かな空間は、観る者の心を癒してくれるようであった。劇が終わり、小さな観客が、思い思いにお面やてんとう虫を手に取り遊んでいるのを目にしたのも心地よい気分にくれた。

戦争を扱った作品から

「最後の晩餐」（イラン）「ベルリン1961」（ドイツ）「小指」（デンマーク）の作品は、日常生活から切り離された生活を強いられる人々を描いていた。異常な空間で少しずつ精神が壊されていく兵士たち。日常での愛、信頼、ささやかな喜び等が削りとられていく空間。明日がやって来るのか、来ないのか、不安な己の存在。これらの三作品の中で、強く心に残ったのは「最後の晩餐」であった。他の二作品にはない笑いがあつた。緊張感だけではなく、ちよつとした動きで観客を笑わせるユーモア。

明日の命すら予測できない現実のなかでの笑いは、哀しみをより深く、孤独をさらに際立たせる。

「嗚呼、最後の晩餐」にはもつとまともな食事を「そんな感情をも呼び起こされる。その瞬間、兵士たちは、無残にも命を奪われてしまう。感情も愛も自分らしい生活も全て持ち込めない戦場という現実には人ほどのように生きていくのか、そして死んでいくのか。私はこの作品の笑いのもつ哀しさに深く心打たれた。

肉体的もつ力強さ

「ニットワン・パールワン」（フランス）、「ウィファイクシオン・プライベートな儀式」（ノルウェー）の二作品の演技は、ダ

多くの作品に出合えただけでなく、スウェーデン・デンマークの美しい風景や歴史ある景観、充実した美術館や博物館等を訪れることができたのも嬉しかった。（元小学校教諭）

アシテジ日本センター「第30回定期総会」を終える

6月5日（日）午後1時30分から、代々木の国立オリンピック記念青少年総合センター・センター棟107室で「第30回定期総会」を行なった。

議長に大野幸則氏、書記に蒔田敏雄氏を選任、議事に入った。2010年度「活動報告」及び「会計決算報告」を承認。

今年度は「役員改選」の年。「選挙」で選出された15名に、事前の「理事会」で中立公平氏を選任。ほかの指名理事については、今後の体制を勘案しながら、理事会で選出することになった。続いて、2011年度「活動方針」及び「予算案」を承認し、総会を終了。

議事終了後、「第17回アシテジ世界大会」デンマーク（コペンハーゲン）・スウェーデン（マルメ）へ報告を行なった。

まず細沼淑子さん（副団長）から、詳細な報告があり、その後、世界理事に当選されたふじ

「東日本大震災」もあり、常に日本の話題がのびたとの由。日本センターの事務局体制等、日本センターにとって、課題も一杯残された「世界大会」であった。

また、観劇した作品は総体的にレベルもたかく、好評であった。



▶議事終了後の「報告会」

「にっこりぽっかり座」

七度目の韓国公演

劇団風の子九州 玉木聡美

ここ数年恒例になってきた五月の韓国公演に今年も行ってきた。韓国公演を何度も経験した山本佐助と、海外初体験の中山由美と、文化庁海外派遣事業で韓国留学した私の計三人の出演者。ソウルとその周辺四都市の四会館主催による、約二週間十二回の公演となった。

三月の東日本震災後、韓国の友人達からはすぐ安否を問う電話やメールが届き、各公演会場での再会でも無事を喜んでくれ、被災地の方々に思いをよせる言葉をもらった。思いを同じにしている友人達が隣国にもいるのだ、彼らと共に私たちは長い道のりを歩いてゆくのだと気持ち新たに旅でもあった。

最初の公演地ソナム(城南)はソウルから約二六キロの衛星都市だ。アートセンターはオペラハウスやコンサートホール・美術館等の複合施設で、舞台監督をはじめ照明・音響等の技術さん達は皆若く、ソウル市の芸術の殿堂(ソウルアートセンター)からこちらの開館にあわせて移られた方達が殆どだそうだ。



初日の五月五日は韓国でもこの日のにあたる。アンサンブルシアター(二七八席)で午前・午後の二回公演だった。会場の外にはエアドームトランポリンが設置され、大道芸等も行われていた。風の子九州は、海外公演の際「その国の子ども達が母語とする言葉」での上演を基本にしているが、語学として勉強するのではなく、丸暗記していくことが多いので「これは何でしょう?」と問いかけはできても、観客からの返答の意味が解らない。あらかじめ「多分こういう言葉が返ってくると思うよ」と教えてもらい、必死でその単語を聞き

取ろうとする。役者が一番苦勞する場面だが、公演が始まって早い段階で、韓国語初挑戦俳優の台詞も「意味が悪いくらいに通じた」と言われホッとした。

次の公演地、ウイジョンブ(議政府)市・芸術の殿堂は何度か公演したことがあり、顔馴染みのスタッフもいる。小劇場(二三八席)二日間四回公演で、保護者が自主的に同じ学校の子ども達を集めて三十人以上の団体で鑑賞したり、終演後のロビー交流ではジュースをプレゼントしてくれた。『マンナム』で共演した劇団サダリの役者さん達とも懐かしい再会を果たして、嬉しい二日間を過ごした。

五月の韓国は気候もよく屋内外での公演が多数ある。韓河大橋の橋脚下やソウル市内を流れる清溪川の河川敷に設置された仮設舞台では国内外のパントマイムや演劇が上演されていた。稽古から二週間連続休みな

ったので、初の休日は公演鑑賞や、観光を楽しんだ。留学中にお世話になった所にも訪ね、それぞれに素敵な充電日となった。ソウルでの初の国立劇場公演は二日間四回。幼稚園保育園の集合公演や、国際結婚で韓国在住の家族の団体、障害者施設と児童養護施設の団体招待もあった。公演後、劇場長／芸術学博士のイム・ヨン Chol(林然哲)先



生は「今回企業の支援を受けて普段舞台芸術に触れる機会のないう子ども達を招待出来た。また日本に視察に行き、東北・関東の劇団・作品招聘を予定していたが、震災後で、とても海外公演に取り組める状態ではないと辞退されたが、時機を見て再度招聘を考えたい。そのような中で今回の上演は大変意義のあることだと思う。」と熱心に語られた。

最後の公演地ハナム(河南)は首都圏の副都心で十六万人弱の大きな市だ。文化芸術会館は開館して五年程の複合施設で、私達は小劇場(二六七席)二時・四時の二回公演を無事に終えることが出来た。恒例のロビー交流では、二時に見た兄弟が「面白かったから四時のも見た!」とチケットを見せてくれた。子ども達との出会いはいつも

元氣を与えてくれるが、その子ども達を取り巻く大人達との新旧様々な出会いもあった。韓国の児童演劇は幼児(未就学児)対象のホールでの集合鑑賞が基本であり、学校巡回公演(体育館演劇)は殆ど行われていない。近年企業や行政の助成金公演は増えたが観客が無料招待になっ

Hand Shadows ANIMARE

ヨーロッパツアー

劇団かし座 後藤 圭

私たち劇団かし座の手影絵

作品「Hand Shadows ANIMARE」は、この5月6月にヨーロッパの三つのフェスティバルから招聘を受け、4ヶ国10ステージの公演を無事に終えてまいりました。

参加したのはスペイン・セゴヴィアのTittirimundiフェスティバル、フィンランド・コウヴォラのKUUULASフェスティバル、そしてチェコ・リベッツのMatejkaフェスティバルの三つです。Tittirimundiはサテライト会場が各地にあり、ポルトガルの公演も含んでいたで全部で4ヶ国での公演



になりました。

この作品は、一昨年のドイツ公演、昨年のオランダ・ドイツ公演に続く3年連続3度目のヨーロッパツアーになります。しかし一昨年、昨年は日程的にもさほどではありませんでした。今回はヨーロッパと日本を2往復しながら25日間のかかなり大きなツアーになります。少し不安もありましたが、お声をかけていただいた以上は出来るだけ期待に応えたいと考え、実行する事にしました。

Tittirimundi (ティティリムンディ) フェスティバル／スペイン・セゴヴィア

このフェスティバルは人形劇の大きなフェスティバル。今年で25回目の開催を数え、5日間、16カ国40劇団が集い、セゴヴィアでは100を越えるステージが行われています。会場もホール、パティオ（建物の中庭）、路上、と多様です。路上の公演など、天気が良くて暑いのに開演の1時間も前から人が集まり、開演の頃には何百人もの市民が人形劇の舞台を取り囲みま



す。さらにサテライト会場がスペイン全土からポルトガルまで沢山有り、いくつかの劇団はその会場を回るスペイン国内ツアーに参加します。

私たちは5月5日に成田を立ち、同日セゴヴィアに入ってから14日間スペイン6都市+ポルトガル1都市を廻り、最後はフェスティバルのメイン会場での公演（5月15日）です。

スペインは大きなホールも小規模なホールも、馬蹄形の伝統的なスタイルの劇場が多く、私たちも大変楽しみました。フェスティバルのメイン会場での公演は美しい会場に満席のお客様の大きな拍手をいただき、とてもエキサイティングな時間を得ることが出来ました。

KULAS (クーラス) フェスティバル／フィンランド・コウヴォラ

南のスペインから移動したのは北方のフィンランドです。このフェスティバルはアマチュアも含めた児童劇のフェスで24回目の開催。小さなフェスで開催日も4日間ですが、5カ国14劇団が集い、オープニングには大統領も出席され、とてもしっかりと運営がされている様でした。私たちはフィンランド大統領のメッセージを直接いただき、こちらからも招聘のお礼を申し上げることができました（緊張した！）。メイン会場の前には参加5カ国の国旗がポールに揚がっています。その中には「日の丸」も掲揚されているではありませんか！見知らぬ国へ行って私たちのために掲揚された国旗を仰ぐ気持ちはなかなか味わえるものではありません。ここでは5月22日に公演を行いました。

Matejka (マテジカ) フェスティバル／チェコ・リベッツ ここは一度帰国し、改めて出かけました。このフェスティバルは「就学前の児童のための人形劇フェス」という対象年齢に対して明確な位置づけのあるフェスティバルです。今回は21回目の開催。5カ国19劇団が集い、期間は6月14日から5日間でした。

このフェスティバルはNárodní Divadlo Liberecという人形劇

団の代表、S Doubraavaが総てのディレクションをしています。そしてその劇団の本拠地の建物（その中に大小3つの会場）がメイン会場になっています。でもだからといって決してプライベートなものではなく、レセプションセレモニーは市庁舎の中で市長が出席して行われ、街のあちこちにこのフェスのマスコットであるゾウくんのパルーンが設置されていて、この地域でとても大切にされていることがわかります。

私たちの「ANIMARE」という作品はこのフェスの対象年齢より上の年齢層を意識して作った作品なので戸惑いもありました。しかしこのフェスのファイナル・ステージとしての公演で、とても期待されている事がわかります。

結果は大成したと言えると思います。出演者達はなんどもステージに呼び戻され、アンコールが終わり、スタッフタイトルがスクリーン上をスクロールしはじめてもまだ拍手は止まず、出演者達は重ねてステージに呼び戻されました。

私たちは3カ所のフェスティバルを堪能するとともに素晴らしい体験をする事が出来ました。世界は広いですね。まだまだ私たちに出来る事はありそうです。

アシテジ日本センターの歴史を振り返る⑮

―多田さんの情熱で日本センターを設立

石坂 慎二

(アシテジ日本センター事務局長)

前号で、児童演劇史上最大の事業であった「佐渡大祭典」を概観し、今号でアシテジ日本センターが行なった「国際シンポジウム」について、詳細の報告を載せる予定であった。

多田さんの情熱で

しかし、アシテジ日本センターの設立に尽力され、会長も務められた多田徹さんが、5月18日に亡くなられた。

その追悼の意味を込めて、多田さんのアシテジ日本センターでの功績等に触れてみたい。

多田さんの情熱なくしては、アシテジ日本センターの設立はあり得なかった。

アシテジ日本センターの歴史をもう一度概観してみる。

1964年(昭和39)、ロンドンで、約三十カ国が参加して、「国際児童演劇会議」が開かれた。これは世界で初めての児童演劇の国際会議である。

日本から落合聰三郎(団長)・岡田陽氏ら八名が参加。

このロンドンの会議では、名称を国際児童演劇協会から国際児童青少年演劇協会(ASSITEJ)に変更して設立することが決められた。

設立総会は翌年(65年)、パリで開かれた。

その後、落合さんは、第2回のオランダのハーグ、第4回のカナダ・アメリカ、第5回の東ドイツのベルリンの世界大会に出席。国際交流に尽力された。

落合さんは、「日本でもセンターの設立を！」と訴えていたらしいのだが、誰も本気に対応しなかったらしい。

落合さんの表現を借りるとこうなる。「私はアシテジに加盟すべきではないかと、児童演劇協会や劇団の人たちに呼びかけたが、耳を貸す人はほとんどいなかった」(『アシテジ』創刊号・1979年)。

この当時、協会は財政逼迫、劇団もまだまだ海外に目を向ける余裕もなかったろう。当然、児童青少年演劇の若き

リーダーである多田さんにも、声はなかったはずである。風の子も他劇団同様に、財政的にもしんどい時代であった。

風の子の海外公演から

1975年、風の子は西ドイツの「ハンブルク国際児童演劇祭」に『トランク劇場』で出演、圧倒的な好評を得る。

その高い評価から、76年、『アニメイム』他でカナダ公演、78年には『トランク劇場』で同じくカナダ公演を成功させている。

このあたりから、多田さんは確実に海外に目を向けていく。

一方、多田さんは国内でも精力的に活動、72年に「児童協」を設立、75年には全国のプロ劇団を網羅した「日本」児童協の設立にこぎつけ、代表幹事に就任。

全児童の活動にも深く関わり、道井直次・荒木昭夫さん等とも親交を深めていく。

多田さんは、児童協の代表幹事として、加盟劇団に「アシテジ日本センターに加盟しよう！」と呼びかける。要請文を出すだけでなく、自ら関西の劇団や東海の劇団に足を運んで、「説得」に廻った。

劇団だけではなく、子ども劇場おやこ劇場にも声をかける。まさしく八面六臂の活躍であ

▲多田さんにとっては、宿敵ともいえる富田博之さんと。1987年、オーストラリア・アデレード世界大会で。この2人が並ぶ写真はめずらしい(浅松一夫さん撮影)。



った。

アシテジ日本センターの設立にあたって、しかたしんさんの活躍も忘れてはなるまい。多田さんの「手足」となって全国的に動き廻られた。

栗原さんを押し切る

劇団側の体制も整った。しかし、それに大きく立ちはだかった?のが栗原一登さんであった。

栗原さんにも大きな理由があった。それは日本センターを立ち上げる以上は、永続性を持たねばならない、ということである。財政的な保証である。

栗原さんは、先行していた国際組織であるITIIや世界アマチュア演劇連盟の財政事情の苦しさをよく知っていた。それだけに慎重であった(今の日本セ

ンターの財政事情をみても、栗原さんの想いはよく理解できる)。栗原・多田会談(時には、しかたさんも入った)を、私は何度か目撃している。攻める多田さん(時には、しかたさんも)、慎重な栗原さん。

結局、栗原さんは、多田さんの情熱に負けざるを得なかった。多田さんが押し切ったのである。「世界を展望して、新しい時代を切り開きたい」という情熱が勝ったのである。

そういうわけで、アシテジ日本センターの設立は、多田さんの情熱をなくしてはあり得なかったのである。

【編集委員】石坂慎二、上保節子、菊田朋義、林陽一、ふじたあさや